Urban Oasis in Shinjuku Chuo Park

関口洋平

制作主旨

人類の永遠なるテーマ、〈環境問題〉。

水資源の問題もその１つで、自然な水循環を失った都会では渇水・都市型洪水さらには Heat island 現象・地盤沈下などの二次的被害も深刻化している。そこで水とは無縁といえる枯渇した都会で、水との触合いを通し水の持つ生命支援システムへの関心を高められるようなソフトな面での環境保全型施設（休憩＋展示）を提案し、人々の意識向上を促す。計画敷地は水に積極的に取り組んできた歴史的背景および人を呼び込みやすい場所性から、周りに超高層ビル群が林立する新宿中央公園内とした。

また意識啓発という面においては、従来の自然科学系博物館のような教育を念頭においた Passive な空間ではなく、Active な空間に Passive な空間を挿入する、つまり〈教育から思考への移行〉を基に形成される空間づくりにある。そのしかけとして、水の下に空間をつくりその空間性を展示物として捉える。また雨水による水力発電の仕組み・沈殿ろ過槽・雨水貯留槽のオープン化をはかる。

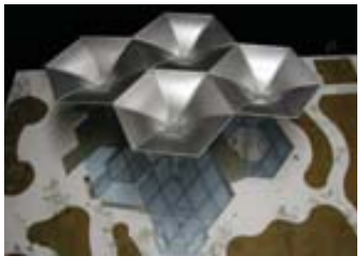
地上の Open space を雨水集水のためのチタンのシェル屋根が覆い、GFRP による水の流れる透明な柱が地下へと貫入する……人々を「Urban Oasis」へといざなう……『ちょっとよろうか』

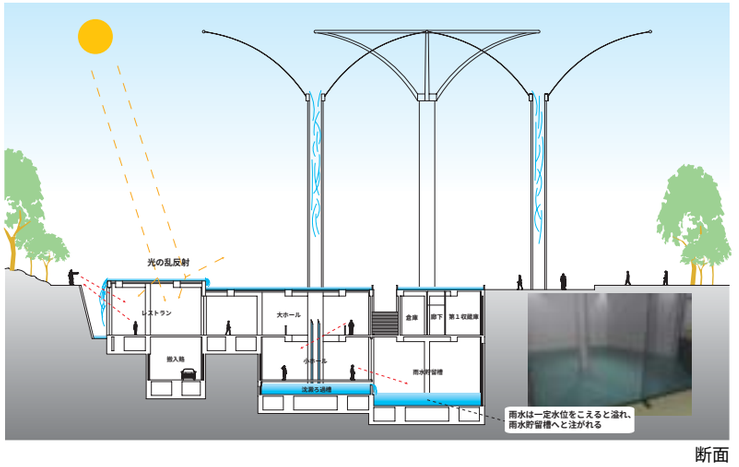
講師評：斎藤公男

現在、環境問題に対して多くの分野において、様々な検討および対策が行われている。環境問題に対する認知度は向上したと思われるが、実際の環境保全への取り組み、関心は、まだまだ十分とは言えないのではないだろうか。関口君の作品は、環境問題に対する人々の意識向上を目的に、都会でほとんど感じることのできなくなった「水」をテーマとした施設の提案である。作品は、水の持つ様々な表情を建築空間に表現しようと試みたもので、その特徴は雨水集水および発電のための地上部のシステムであろう。大屋根で集めた雨水を柱内に落下させることで発電を行う着想は極めてユニークで、水の流れを落下したり吸い上げたりと視覚的に表現することで、人々が水を意識するよう工夫している。また、シンプルでかつダイナミックなシェル形状の屋根も魅力的で、公園の景観を損なうことなく超高層ビル街に１つのアクセントを生むことに成功している。一方、地下空間は地上とリンクしながら上手く水をデザインし、展示要素として空間に取り入れ、心地よい空間を創出している。リアリティーに対する議論はさておき、全体計画のみならず構造解析にも積極的に挑戦した点を高く評価したい。

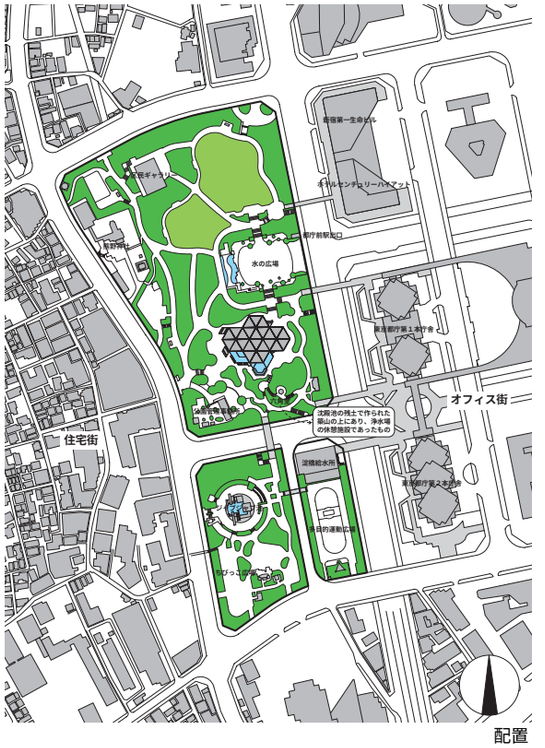
大ホール（エントランス側から）

大ホール（展示コーナー側から）





断面


オフィス街
住宅街
水の広場
都庁前駅
都庁前駅
都庁前駅